

## ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル

1930年11月11日

—— ケル、『特性のない男』を批評する ——

長谷川 淳 基\*

Robert Musil und Alfred Kerr  
vom 11. November 1930

Kerrs Kritik über den „Mann ohne Eigenschaften“

Junki HASEGAWA

### I 始めに

作家ムージルと批評家ケル、二人の生涯の関わりにおいて、最後にケルがムージルの作品を批評したのは1930年11月11日、ベルリナー・ターゲブラット紙上での記事「一日の周縁・余白」<sup>1)</sup>においてであった。この批評でケルは、公刊されたばかりのムージルの大作『特性のない男』に言及した。

この後のムージルとケルの関係となると、1935年のパリでの作家会議へ両者が出席し、共に講演したということがあるが、その折に二人が直接に顔を合わせたかどうか、じかに言葉を交わしたかどうかについては不明である。そして、さらにその後ということになるとムージルの死を聞き知ったケルがムージルに手向けた弔辞ということになる。1942年ロンドンのことである。

本論考では、ケルの批評「一日の周縁・余白」を読み、このときのムージルとケルの関係を考察する。

### II 批評「一日の周縁・余白」について

ケルの批評記事「一日の周縁・余白」はローマ数字をあしらったケルのいつものスタイルで書かれており、今回の批評全体は13の部分から成っていた。『特性のない男』については、この13の部分のうちの第7番目の項目で書かれていた。その部分を読むことにしよう。

#### VII ムージル

先ごろムージルは50歳になった — しかし、つい昨日ベルリンに着いたばかりのシュトゥットガルトの工科の学生たちが、いつの間に。昨日来のあの学生たちが、いつから50歳になっていると言うのだろう。（「時は余りに速く過ぎた」とヘッペルは言っている。）

---

\*人間関係学科 教授

その当時彼は、今も記憶に留めるに値する彼の本の原稿を自ら持参した。『生徒テルレスの惑乱』である。すべての文について、我々是一緒に点検した — そしてその後のこと、しかしながら彼は、つんとすました『熱狂家たち』を創作したのであった。先ごろ彼は千ページの長編小説を、その題名は『特性のない男』であるが、書き加えたあとに（単にページ数が千に及ぶということではなく）、つまりはあっちで苦勞し、こっちで骨を折りつつ数多くの高みや深淵を、途中で報われることなど無いままに、通り抜けたあとに、そのあとに、彼は空を見上げたとき、そして私はこの本を読んだとき、感覚はあのハイスターバッハの修道士のそれに重なるのである — 修道士は、きのうから今日の内に一個の人生が欠けるところなく経過し終えたことを、驚きと共に理解するのであった……（私はそのときには、あまりいい気持ちがしないだろうが）。

ムージルのものと出はグラーツとオルミュッツである。しかしながら、彼は旧のオーストリア人ではなく、重要人物である。

ムージルとケルの関係についてのまとまった研究はカール・コリーノの論文が最初のものであり、唯一のものであるが、『特性のない男』を評したケルのこの批評はコリーノの論文では見過ごされていた。後年になってホールがこの記事を発見し、その結果をムージル研究の機関紙に発表した<sup>3)</sup>。そこではⅦの部分のみが引用され、紹介されている。

しかしながら、ケルはこの日の批評文「一日の周縁・余白」について、各部分はもとより全体の構成についても十分に考え抜いていた。この点については、ケルが自らの批評を「芸術作品」と見なしていることを知る我々にとっては、決して意外ではない。ムージルについて書かれている部分について十分な理解を得るためには、他の部分の存在ないし、それらとの関連を無視することはできない。そのようなわけで、以下この日のケルの批評文の全体を確認しておきたい。

「一日の周縁・余白」の最初の項は「Ⅰ. どこ？」と題されている。導入のこの部分は重要である。訳出しよう。

## I

一日はその周縁・余白をどこに持っているのであろうか、是非とも知りたいところである。ほぼこう答えることができよう、「中央に」。……さて、逆説である。

しかしながら個々の印象は、真ん中を貫いて動いていく。中断され、置き換えられ、続行され、身体の業務—身体が毎日の真ん中を形成している—を引き継ぐ。すなわち、気圧についてイエスとノーを言い、もとよりつつましい運動と呼吸、そして期待と没入によることは勿論のこと（期待は肉体の行為である）。

一切が経過した時、周縁・余白でこれらの思考が一つにまとまる。周縁は真ん中にある。

批評を生業とするケルは、自らの批評が発生するメカニズムを説明している。できごとを体験するときに、読書も観劇もこれに含まれるのであるが、時間の経過に伴って刻々と印象が発生し、やがてそうしたできごとが、つまりは体験がすべて終了する段になる。そのときに、そののちに、先に個々に生じた印象は思考という熟成を経て一つの批評として獲得されることになる、ひとまずのところケルはこう言いたいのである。この部分については、本論の先でもう一度取り上げて論じることにはしたい。

「Ⅱ. 哲学博士カサノヴァ」では、つい先ごろベルリンで出たエドガー・フォン・シュミット＝パウリの『別人のカサノヴァ』<sup>4)</sup>が論評されている。この書は、色事師として世に知られる以前の時期に、カサノヴァが人間存在の考察に関する著述に勤しんでいたことを書いたもの

で、カサノヴァ自身の文章を資料として踏まえている点で興味深いものであった。世間周知のカサノヴァならぬ「別人の」真面目で、お固いカサノヴァが書かれている本など退屈なだけで、と考えてしまう人たちに向けてケルは、この本は大いなる価値を有する、と主張し、「そのわけは、この書は人間の魂の広がりについて、その可能性の存在に光を当てているからである」と結ぶ。

「Ⅲ. 手紙」では、この『別人のカサノヴァ』の一節にある「ドイツ人は手紙を受け取っても、返事を出さない」とのカサノヴァの言を受けて、ケルは「そういうわけだから私は常々、自分自身を」、手本とも典型とも言えるべき「良いドイツだと思っていたわけだ」と応じ、読者を笑わせ、この書への共感を示す。

「Ⅳ. 新聞配達の婦人」では、当世すなわち1930年11月の今、貧困に喘ぐ民衆の弱みに付け込む宗教扇動者のような存在がはびこっていた。病気の夫に代わって新聞配達をする婦人が、そうした先導者に帰依して自足する姿をケルは報告し、この例はしかしながら狭い地域、即ちベルリンという個別の地域に影響を持つに留まるもので、現在のドイツの「国土全体を覆う衰退を示すものではない」と政治上の陰鬱な雲がドイツを覆いつつある状況に言及し、この章を結ぶ。

「Ⅴ. ホセア・E」では、ウィーンの作家ロベルト・ノイマンの近著『人形陳列館』にホセア・Eという名の、同じくいかがわしい宗教家について書かれていることが、ケルの感想を交えて報告されている。

「Ⅵ. 劇場支配人」は、演劇批評家ないしはケルという存在を迷惑に感じ、これに対抗する何らかの行動を起こしている劇場支配人に向けて書かれている。ケルは、批評を拒む劇場へは、はたして足を運ぶ価値があるのかと疑問を投げかける。

そしてこの後に、「Ⅶ. ムージル」の項が来る。

「Ⅷ. 根拠のない大騒ぎ」では、演劇事情に通じてはいながらも、毎度過激な言葉を多用して、火のないところに煙をたてるようなことをしているジャーナリストのグループに、ケルは冷笑を浴びせる。

「Ⅸ. 炭鉱もの、現在の注目作品」でケルは、アンナ・グマイナー Anna Gmeyner (1902 - 1991) やアルフォンス・ハイドウク Alfons Hayduk (1900-1972)、ゲルハルト・ポール Gerhard Pohl (1902-1966) らの鉱山労働者を素材にした作品を紹介しつつ、この素材の流行に対して、あきれ顔を見せる。

「Ⅹ. 出会い」では、先ずベートーベンとシューベルトの出会いの場面の逸話が紹介される。すなわちベートーベンがシューベルトのピアノに向かう手の軽やかさと、しかしながらその手から生じるメロディーの充溢に驚嘆したと伝えられている。そしてリーバーマンはスレフォークトと出会ったときに、深く考えながら「私には彼ほどの才能はない……」と言ったことをケルは引く。リーバーマンはスレフォークトより21歳年長で、その成功ぶりはスレフォークトを凌ぐ。にもかかわらず、である。ケルはリーバーマンについて、ベートーベンについて、その深さと偉大さを言っている。

「Ⅺ. ロワナール」では、1856年に生まれ、この年1930年に亡くなったフランスの詩人ポール・ナポレオン・ロワナールのことが綴られている。ロワナールは自分の葬式に際して自作の詩を自ら朗読した。生前に録音されていたものが、葬式に際して使用されたわけである。ロワナールの生前の意思によるものであった。これについて、葬儀についてそうしたことを求める権利が、死者にあるのかどうかというアンケートが実施され、ケルのところにも回答の要請があ

った。ケルは、もちろん死者にその権利はあり、ケル自身は詩一篇では不足であり、自分の葬式では蓄音機を使って本格的な内容の講演を流したいとの考えを述べる。生前には誰もこうした風なことを表立って言いはいしない。でも死んでしまった暁には、こういうことも願わしいことではないだろうか、とケルはつぶやく。で、あるならば善は急げ。朝、仕事にかかるのに、早すぎるということはない、の譬えもあるとおり、さあ仕事に取り掛かろう、自分の葬儀のときに慌てふためくことのないように、と自分を励まして、ケルはこの項を結ぶ。

「XII. 一日の周縁・余白」では、ここまでの12の内容が確認される。

「XIII. 省察」と題するこの日の批評文の締めくくりとしてケルは、人生が辛く悲しいものだと考える人間は愚か者、人生は毎日が新しく色彩豊かなのだから、と人生賛歌の持論を韻文で披露してこの日の批評を結ぶ。

以上、13の項目のあらましをたどってきたが、これらを踏まえ、次章ではあらためてムージルの項について考察することにしよう。

### Ⅲ ムージルに向けるケルのまなざし

先ごろムージルは50歳になった、とケルは始める。ムージルは1880年11月6日に生まれた。ムージル50歳の誕生日から5日後の1930年11月11日火曜日、このケル批評が発表された。

「シュトゥットガルトの学生たち」、とケルは複数形を使っている。ケルを訪ねたシュトゥットガルトの工科の学生は、ムージルー一人のことを内容としているので文法的には単数形でなければならない。今の場合にケルが複数形を使っている理由であるが、ムージルとケルの生涯にわたる関係を知る者には容易に、いやそうでなくとも、批評家ケルについて何がしかの知識を持っていた当時の人たちには、いかにもケルならではの言葉遣いと思いついたに違いない。すなわち、ケルがムージルの世に出した当時、つまりはここでケルが言う「いつまでも記憶に留めるに値する彼の本の原稿を（ムージルが）自ら持参した」当時、ケルを頼みに思い、彼を求めたムージルのような若者が数多くいた。なによりもケルの側に、そうした若者たちを歓迎する気持ちがあった。旧来の文芸批評家の勢力に戦いを挑むための同士、ケルの言葉を引用するなら「従兄弟」<sup>5)</sup>を必要としてからである。この従兄弟の代表格のひとりがムージルであった。作家クラブントが公序良俗に反する作品を書いた廉で裁判沙汰が持ち上がったときに、このクラブントを擁護した論文でケルはこう書いている――

「以前、私はターク紙に全く無名だったハンズ・キューザーについて、全く無名だったローベルト・ムージルについて、大きなスペースを使って書き、そして二人に出版社を世話した――片方の者は、やはり薄暮の領域を、子供による数々の身の毛のよだつような体験を扱っていた。今日二人はドイツの若い文学のジャンルで、その価値を認められている。私は昔のことを自慢しようと思って、このことを披露しているのではなく、現に問題としている人物のことを言いたいがために他ならない。」<sup>6)</sup>

この文章を発表した1913年12月には、ケルは「自慢しようと思って」ムージルのことを書いたのではなかったのかもしれない。しかし1930年11月の今は「自慢しようと思って」ムージルのことを書いている。自慢する十二分の原因がケルにはある。ケルがいくら自慢しても、自慢しすぎとはならない。

ムージルー一人について言いながら、「シュトゥットガルトの学生たち」と複数形を使うケルは「文筆家志望の多くの若者や学生がベルリンへ、ケルのもとへやってきた、その中にはシュトゥットガルトからやってきた学生もいた。ケルはこれらの若者や学生たちを多く世に出して

やり、彼らは現に成功を収め活躍している」とただ言えばよかった。しかしケルはそうは言わなかった。ケルの気持ちの中の「これらの若者や学生たち」の「これら」という指示語が受けている名詞を「シュトゥットガルトからやってきた学生」としたのである。そのままでは、誰にも理解できないので、「シュトゥットガルトからやってきた学生」を複数形にしたのである。何のために？ 自慢のためである。当時自分のところへやってきた複数のムージルたちがいて、自分は彼らを（！）世に出してやった、ムージルはその一人に過ぎない、自分は偉い、ケルはそう言いたいがために、シュトゥットガルトの「学生たち」と複数形にした。ケルとしては、ムージルがそのうちの一番だった、と言っているのであるから、許容されて良い表現としよう。褒め方が、ムージルの真価の認識がそれでもケルには不足していると考えerる向きには、こうした許容は許しがたいところであろうが。

「時は余りに速く過ぎた」とのヘッベルの言葉が引用されている。

1813年3月18日に生まれたヘッベルは50歳と9ヶ月で、1863年12月13日にその生涯を終えた。演劇批評家ケルは劇作家ヘッベルに対して、「魂と感情に根ざす演劇活力のゆえに、常に最高の賞賛を贈った」<sup>7)</sup>。貧困から身を起こしたヘッベルであったが、結局は若い時代の極度の経済的な苦境に起因する健康障害により、命を奪われることになった。亡くなる年1863年、ヘッベル50歳。この50歳の誕生日について、ヘッベルは「眠って夢でも見ていたかのように、誕生日の日は過ぎてしまった。私は病気だった。それはそれでよかったのだ。病気ということでもなく、当から誕生日の祝いはしないものと決めていたのだから。50歳を越えた。思うに、これまでと同様に時を過ごしていくことだろう」<sup>8)</sup>と記している。ヘッベルの健康は徐々に悪化していた。いまだ50歳になったばかりのヘッベルであったが、打ち沈んだ気分が漂う。

この後6月になってヘッベルはザルツカンマーゲートのグムンデンで療養生活を送ることになる。グムンデンからの、文字通りの最愛の妻クリスティーネに宛てた手紙の中でヘッベルはこう書いている。「ヨハン・クリスチアン・ギュンターと一緒に歌を歌う必要がないことを願うばかりです。『青春、勇気、そして快活は煙となって消えていく。さて自分の力をまっとうに使わねば、と自覚を深めていくうちに、その力は夢のごとく消えている』—僕は、この詩にいつも深い感動を覚えてきたのですが、作詞したギュンターはかわいそうなことに、この詩を死ぬ間際に書いたのです。』<sup>9)</sup>

手紙のこのくだりの直前で同じくヘッベルはクリスティーネに「50年間の悪夢を払いのけ、逃げて行く時間から、なお数作の歴史に残る作品をもぎ取れるかどうか、勇気を出して挑戦しよう」と僕は決心しました」と述べている。生きることへの意欲というのではなく、作品創造への意志の持続の強さを、なおもヘッベルは持っている。

「時は余りに速く過ぎた」、ヘッベルがこの言葉をどこで発したのか不明である。この言葉が引用されている脈絡からして、50歳の誕生日に際してヘッベルが自らの人生を振り返って発したように想像されるのだが、ヘッベルの日記、手紙、先年1862年に完成し、クリスティーネに捧げられた三部作『ニーベルンゲン』にも見つからない。しかし、この時期のヘッベルの文章のすべての、どここの箇所に出てきてもふさわしいと感ぜられる言葉ではある。ヘッベルの文を引用するときのケルは必ず自信と確信に満ちており、批評することの喜びを発散させている。

「その当時彼は、いつまでも記憶に留めるに値する彼の本の原稿を自ら持参した。『生徒テルレスの惑乱』である。すべての文について、我々是一緒に点検した」ことをケルは明かす。『テルレス』が完成するまでの過程で自分が協力したとのケルの直接的または間接的な発言は、1913年12月「パーン」誌、1923年「ヴィンツェンツ批評」、1929年「熱狂家たち批評」<sup>10)</sup>、今

問題にしている1930年11月「特性のない男批評」、そして1942年のムージルへの「追悼演説」において、と終生にわたって繰り返されており、前後5回に及ぶ。その関わり方の詳細は明らかではないが、ケルは『テルレス』への協力を自慢に思っていることは間違いのないところである。

「つんとすました『熱狂家たち』」とケルは述べている。様々な事情が絡んで、やがて変哲もない一つの結論が生じることは人間関係のすべてについて当てはまることであるが、ムージルとケルの関係が完全に冷えたのは、先年1929年4月の『熱狂家たち』の上演に際してのことであった。その後一年と半年が経過した今1930年11月、『熱狂家たち』へのケルの否定的な印象は変わるところがないようだ。

『特性のない男』へのケルの言及—『特性のない男』が書店に並べられた初日はしかと言うことはできないが、11月6日のムージルの誕生日の前後のことであろうと考えられる。11月7日付のベルリナー・ベルゼン・クーリア紙が『特性のない男』の一部を掲載していることから11月以前ではないようだ。

今日11月11日のケルによる『特性のない男』への言及は、量と内容から言ってとても新刊批評と言えるものではないが、それでもベルリン随一のベルリナー・ターゲブラット紙で、しかもケルが書いたということだけを考えてもその意味は大きい。ケルはどのような気持ちで今日のこのくだり「Ⅶ. ムージル」を書いたのだろうか？この点について以下さらに考察してみたい。

このケルの文章についてはコリーノが論評している。「そしてアルフレート・ケルはベルリナー・ターゲブラット紙で何と11月11日になってから登場してきた。しかしながら、文学上の育ての親の一人たる、いや、親は通常一人ということで、文学上の育ての親がと言い直そう、親たる人物であれば誕生日から5日も経過したあとのお祝いでも、一向構わないとでも考えたのであろうか？『一日の周縁・余白』という意味深長なタイトルのもと、いつも通りにローマ数字を使い、そのⅦでケルはムージルについて言及した」<sup>11)</sup>と記し、すぐに続けてコリーノは「Ⅶ. ムージル」の部分を全文紹介している。

コリーノは「意味深長」としているが、どのように意味深長なのか、これ以上の説明は述べられていない。確かに意味深長なのである。

ケルとしては、彼のできる限りの力を注いでムージルの誕生日と、そして『特性のない男』へのお祝いの言葉を綴ったのであった。なぜこう言えるのか？それはコリーノも言うように表題に表れている。ではその表題「一日の周縁・余白」は何を意味しているのか？

アルフレート・ボルガーの批評のタイトル「余白に記す」<sup>12)</sup>は、当時のドイツでおおよそ新聞に目を通す者なら、誰もが知っていたと思われる。事件、出来事などについて印象や批評を書きとめるときに、ボルガーはこのタイトルを複数回にわたり使った。

ケルはこうした意味合いを踏まえて、自問するのである、「一日の周縁・余白」はどこにあるのか？先の繰り返しになるが、批評文はどこに由来し、どこを經由して、批評文という形で獲得されるのか。ケルはこのことを問うている。毎日の事件あるいは出来事、あるいは毎日の文学の誕生、毎日の演劇の上演があり、それに触れること、ないしは体験こそが即ち印象である、私の批評は作品と一つのセットをなすものである、ケルはそう言っている。批評は余白に書かれるものと世間は了解し、批評家もこのように理解しているが、自分の批評はこれとは異なる、なぜならば自分の批評は周縁に書かれていながらも、その周縁は真ん中と、即ち作品と一つのものであるから批評はやはり「真ん中」に存在する、そうケルは言う。周縁・余白は

どこにあるか？真ん中にある、とケルは言っている。

真ん中を見よう。「Ⅶ.」が真ん中にある。「Ⅶ.」には何が書かれているのか？「ムージル」についてである。いや、そうではない。この日の13からなる項目のうち、ひとつだけはケルは自身のことを書いている。こうしたものこそがこの日の「Ⅶ.」の項目すなわち「Ⅶ. ムージル」なのである。ケルは真ん中で、ムージルと『テルレス』の「すべての文について、一緒に点検した」と書いた。ケルはその生涯を通して批評活動を行い、とは即ち創作活動を行った。ケルにあっては批評は芸術作品そのものに他ならなかったからである。ケルは要するにムージルと二人して『テルレス』を眺め、その全体を仔細に批評した。とは即ち、ケルは『テルレス』の全体を細部に至るまで創作したのであった。批評家として、『テルレス』のすべての文について、である。

批評全体を眺めて、もう一言付け加えておかねばならない。この日の批評「一日の周縁・余白」の両端「Ⅰ.」と「ⅩⅢ.」,そして真ん中の「Ⅶ.」,これら3つの項目を要にして、この日のケルは批評はやはりケルの「作品」となっている、とすることができる。

#### Ⅳ 結び

ムージルをケルはハイスターバッハの修道士になぞらえている。ペテロの一節「主にとって一日は千年のごとくであり、そして千年は主にとって一日のごとくである」の意味を考えて庭を歩いているうちに森に入り込んでしまった修道士は、僧院の鐘の音を聞いて我に返り、自分には日課の務めがあったことを思い出し急ぎ僧院に戻る。僧院に到着後、徐々に事情が判明してくる、時はすでに300年が過ぎていた。このことを理解した修道士にはわかにその場にくずおれる。ほどなくやって来た臨終の際に修道士は、僧院の兄弟たちに言う「くよくよ思うではない、私には分かったのだから、主にとって一日は千年のごとくであり、そして千年は主にとって一日のごとくである、と」

ケルは新刊の『特性のない男』をいち早く手にとって、すぐにページを繰った。『テルレス』の原稿を携えて自分のところやってきた学生のムージルと、彼ケルとの間に流れた時間が、そして師ケルから学び取った文学がそこに在った。主人公ウルリヒはムージルの分身であったから、ケルは他のどの読者よりも、自分こそは『特性のない男』が分かる、理解できると感じたことであろう。すでにその書き出しからして作品に顕著なユーモアとイロニーがケル譲りのものであることは、ケルならずとも容易に見て取れる。

そして、ケルはあらためてムージルと自己との原理的な違いに気付いた。『特性のない男』の出だしから16番目の章<sup>13)</sup>である。トマス・アクイナスが研究を完成させて家の戸口を一步出た時、一台の電車が轟然と走りすぎた。万有博士の面食らった顔……。トマス・アクイナスはムージルそのものである、ケルには咄嗟にこのことが分かった。ハイスターバッハの修道士への連想。

1905年の出会いから25年。ムージルにとっては熱狂、忘我、没入の中で経過したほんの一日であったのだろうとケルは思いやる。1905年25歳だったムージルは、その後の25年間を、ほんの一日を経ただけのごとく、何ら変わることなく、おのれが信じるままに生きてきた。そうして獲得されたものが『特性のない男』であったこと、そして、弟子ムージルはやはりこの自分とは違うということ—自分はこうした風な人生は真つ平御免である、こうした人生の経過が自分に起こったとするならば「私はそのときには、あまりいい気持ちはしないだろうが」—にケルは思い至る。

ケルは言うのである「先ごろムージルは50歳になった — しかし、つい昨日ベルリン着いたばかりのシュトゥットガルトの工科の学生たちが、いつの間に。昨日来のあの学生たちが、いつから50歳になっていると言うのだろうか。（「時は余りに速く過ぎた」とヘッペルは言っている）」と。

ケルはこの批評で『テルレス』『熱狂家たち』そして『特性のない男』の名前を挙げた。『テルレス』『熱狂家たち』そして『特性のない男』この三作品についてムージルがラジオで、一回の放送機会に同時に朗読したことがあった。1927年2月6日日曜日ベルリン放送、午後1時から1時間20分にわたる放送番組においてのことである。このときの放送で世間は、人々は初めて『特性のない男』という小説の存在を知った。ケルは『特性のない男』が世に出る最初のシーンでもムージルに付き添い、紹介の労をとる役割を務めたわけである。『テルレス』『熱狂家たち』そして『特性のない男』を一まとめのものとして放送用マイクに向かった司会役のケル、そして朗読したムージル。一週間後のベルリナー・ターゲットブラット紙に出たラジオ番組講評によると、ムージルと出演したケルはこの時の番組を盛り上げるために大いに力を尽くしたようだ。それから3年余を経た今1930年11月、ようやくにして日の目を見た『特性のない男』を紹介するにあたってケルはやはり『テルレス』『熱狂家たち』そして『特性のない男』の名前を挙げるのであった。

批評「VII.」に戻るが、この項目の最後の文で、「重要な」bedeutend 人間ムージルと褒めながら、ムージルのもう一つの劇作品『ヴィンツェンツとお偉方の女友達』Vinzenz und die Freundin bedeutender Männer と語呂を合わせるサービスもケルはしている。

出版なったばかりの『特性のない男』の本のページを繰るうちにケルはあらためて自分とムージルとの浅からぬ関係を再認識した。冷却してしまった二人の関係について、ケルは今何がしか回復の手立てを講じるべく、仔細を凝らして批評「一日の周縁・余白」を書いたのであった。

しかしながら、ムージルにはこうしたケルの意図は伝わったのであろうか。ムージルはケルという人物を見限ってしまっているものであろうか？ 多くの反響はあったがムージルは総じてこの時の、『特性のない男』が出た時の批評界に幻滅を感じている。特に、ケルに関しては『熱狂家たち』の初演のスキャンダルでムージルは決定的な失望を感じた、と言えよう。しかし、人と人の関係は、少なくともこの二人の関係はそれを機会に無縁のものとして解消されることはなかった。表面的な関係は切れてしまいがちながらも、それでも片方は相手を愛し続けたし、もう片方は相手に対し、人生で出会った最も素晴らしい出会いとの気持ちを心の最も深い部分で抱き続けた。魂と魂の触れ合い、それは確実に『テルレス』の時に生じ、その触れ合いの記憶は二人それぞれに終生消え去ることはなかった。

1930年11月、ムージルとケルとの出会いから25年目、『特性のない男』が世に出た。これを機に書かれたケルの批評を締めくくり、XIIIの項の最後の文「人生は毎日が新しく色彩豊かなのだから」は、やはりムージルとケルの互いに相容れることのない人生観の相違を、独特のユーモアを交えて言っているのであろう。この年から数えて12年後、ムージルをエレクトラに、自らをクリソテミスになぞらえケルはこの認識を繰り返すことになる。ケルの思いは深く、そして誇らかに冴えていた。ケルは、『特性のない男』の発刊に際しておのれのなすことをなした。片方が思いを抱いてことをなせば、その思いはいつか相手に届くのであろう。ケルの今回の批評は、「特性のある男」を自覚するケル渾身の快作であったと評することができる。



注

- 1) *Berliner Tageblatt*, 11. November 1930, Morgenausgabe
- 2) Karl Corino: *Robert Musil und Alfred Kerr*. In: Karl Dinklage u.a.(Hg.): *Robert Musil. Studien zu seinem Werk*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt Verlag) 1970, S.236-283
- 3) Murray G. Hall: *Alfred Kerr zu Musils 50. Geburtstag*. In: *Musil Forum*. 17./18. Jahrgang, 1991/92, S. 130
- 4) Edgar von Schmidt-Pauli: *Der andere Casanova*.
- 5) Alfred Kerr: *Das Neue Drama*. Berlin (S.Fischer), S. XII
- 6) „PAN“, Dritter Jahrgang, No. 31, 23. Dezember 1913, S. 717
- 7) Vgl. Alfred Kerr: „*Ich sage, was zu sagen ist*“ - *Theater Kritiken 1893-1919*. Frankfurt am Main (S. Fischer) 1998, S. 825
- 8) Friedrich Hebbel: *Tagebücher. Bd. IV. (Säkular Ausgabe)*. Bern (Herbert Lang) 1970, S. 283
- 9) Friedrich Hebbel: *Briefe. Bd. VII. (Säkular Ausgabe)*. Bern (Herbert Lang) 1970, S. 359
- 10) 『熱狂家たち』を批評した折にはケルは「原稿を見た」と表現しているに留め、作品にケルの手が入っている旨は言っていない。 Vgl. Alfred Kerr: „*So liegt der Fall*“-*TheaterKritiken 1919-1933 und im Exil*. Frankfurt am Main (S. Fischer) 2001, S. 482
- 11) Karl Corino: *Robert Musil*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 2003, S. 997f.
- 12) Vgl. Alfred Polgar: *Kleine Schriften. Bd.I*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1982, S. 226 u. S. 325
- 13) Robert Musil: *Der Mann ohne Eigenschaften*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978, S. 56